

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 10 月 19 日現在

機関番号：14503

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24500817

研究課題名(和文)セルフメディケーションの担い手を育成する医薬品教育プログラムの開発

研究課題名(英文) Program development for education on medicines developing human resources on self medication.

研究代表者

鬼頭 英明 (KITO, HIDEAKI)

兵庫教育大学・学校教育研究科(研究院)・教授

研究者番号：90161512

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円

研究成果の概要(和文)：中学校保健体育科において医薬品に関する内容を題材に取り上げ、医薬品の外箱、添付文書を活用した指導実践を実施した。6週間後に行った質問紙調査によれば、医薬品の正しい使い方の知識は高く、意識や医薬品の学習への興味・関心も継続していた。教員の意識調査では、医薬品に関する知識や情報は大切であると認識していたものの、医薬品教育への抵抗感もあり、医薬品に関する情報が少ないことが明らかとなった。こうした課題を解決するための情報提供に資する教材を作成し、評価検討を行った。また、生徒向けのデジタル絵本教材を作成した。また、生徒主体の課題解決型の学校保健委員会活動を薬剤師の協力を得て実施し、参考冊子を作成した。

研究成果の概要(英文)：In this study, classes on "the correct usage of medicine" were conducted in accordance with the new courses of Study. In addition, the teaching method and teaching materials used in the classes were examined to create a model teaching plan with outer case and instruction. The posttest questionnaire was administered six weeks after the classes. There were some significant differences between the pretest and posttest. The proportion of participants who answered that "medicines have some side effects" increased significantly. The consciousness of learning about medicines and knowledge of medicines of junior high school students significantly improved because of the intervention. Consciousness of teachers for the education on medicines in school were high. However About 30 to 50 % of teachers felt difficulty for students to teach medicines, and also information for teaching was little. In this study, we made teaching materials for teachers and digital materials for students.

研究分野：学校保健

キーワード：医薬品教育 保健学習 セルフメディケーション 中学校 高等学校 薬剤師 教材 デジタル絵本

1. 研究開始当初の背景

(1) WHO は 2000 年、自分自身の健康に責任をもち、軽度な身体の不調は自分で手当てできるセルフメディケーションの考え方を提示し、医薬品使用についてもガイドラインを示した。医薬品は、正しく使用しなければ重大な健康被害を招く危険性があるが、我が国では、医薬品に関する教育は十分に行われてきたとは言えず、不適切な使い方をしている事例の少なくない。こうした背景を元に、青少年に対して医薬品の正しい使い方について指導することの重要性が次第に認識され、新しい学習指導要領においてもその充実が図られつつある。

(2) 医薬品の正しい使い方を指導するに当たっては、その内容が薬学の専門性に関わること、及び指導を受けた生徒が生涯にわたって実践に活かすことができるようにするためには、教員が理解できるようにするとともに、わかりやすい教材の開発及び指導の工夫が求められる。

2. 研究の目的

(1) 中学校における「保健体育科」教員を対象として「医薬品」に関する知識や意識について調査を実施し、教育実践のための基礎資料とする。

(2) 中学校で、保健体育、特別活動など教科・領域間での連携による効果的な指導方法について検討し、授業実践を行う。

(3) 養護教諭や薬剤師の専門性を生かした保健指導の進め方について検討する。

(4) 教員のニーズに応じた教材開発を行う。

3. 研究方法

(1) 医薬品に対する教員の意識調査

中学校保健体育科教員（保体と略す）、養護教諭（養教と略す）を対象として医薬品の教

育に対する指導者の意識調査を実施した。質問項目は教員自身の医薬品使用行動に関する項目、医薬品教育に関する項目とし、郵送による質問紙調査を実施した。

(2) 中学校保健学習の医薬品授業の実践

授業実践の対象は、中学校 2 年及び 3 年生とし、9 学級において実施した。実施にあたっては、校長に研究の趣旨を説明し、同意を得た。授業の主題は生徒が医薬品の間違った使用行動を起こさないために「医薬品の正しい使い方」を主題とし、グループワーク主体で実施した。授業は 2 時間で構成し、指導内容については、第 1 時では「医薬品を使用する必要性について」、「医薬品の種類、錠剤とカプセル剤の違い」、第 2 時では「空箱から情報収集」、「医薬品の正しい使用方法の理解」、「薬の体内動態及び体内血中濃度の理解」、「医薬品の副作用についての理解」とした。第 1 時では、「薬を使うってどんなとき」をテーマとしブレインストーミングを実施した。また、カプセル剤と錠剤の違いについては模型を用い、その構造の違いについて確認するとともに、カプセル剤については少量の水では貼り付いてしまうことを実験で示した。第 2 時では薬の空箱に記載されている情報と内容を書き出すこと、水やぬるま湯以外の飲み物で医薬品を使用した場合に化学変化が起こる可能性があることを実験で示した。体内動態についてはパネルを使用した。さらに、医薬品の添付文書を活用し、書かれている情報を書き出すとともに、その中から副作用について書かれていることに気付くよう働きかけた。

授業実施前及び実施終了後の約 6 週間後に生徒の意識調査を実施した。いずれの調査も無記名自記式質問紙を用いて実施した。

(3) 教員対象の医薬品情報提供小冊子作成

教員を対象とした意識調査の結果に基づき、情報内容を以下の6項目に絞って、内容を吟味し、B5版8頁の小冊子を作成した。医薬品の教育新設の背景、学習指導要領と解説の説明、医薬品の安全性に関する最新情報、医薬品とのつきあい方(セルフメディケーション)、協力授業のポイント、関連Webサイト情報。

作成した小冊子は、A県教育委員会及びB市教育委員会管下の中学校、保健体育科教諭及び養護教諭に配付した。配布時に評価シートを添付し、自由意思による評価を依頼した。回答については、ファクシミリによる返信を依頼した。

(4) デジタル絵本教材の作成

日常生活において医薬品使用が起こりうる状況を想定し、場面をデジタル絵本化して、興味・関心をもてるよう工夫した。絵本においては、選択肢の正誤を生徒に問い、考えさせるように工夫した。

(5) 薬剤師と連携した高校生主体のセルフメディケーション活動

生徒保健委員会が核となり、セルフメディケーションをテーマとして生徒の意識調査を行うとともに、薬局を訪問して薬剤師にインタビューを実施するなどの実践活動を行った。また、生徒主体で冊子を作成するとともに学園祭での展示発表を実施した。

4. 研究成果

(1) 教員を対象とした意識調査

質問に対する肯定的回答(全く思う+どちらかと言えばそう思う)の割合を示す。

「必要に応じて医薬品使用は大切」と回答した割合は保体、養教いずれも90%であった。

「安全性の面から医薬品使用に抵抗がある」

については、保体35%、養教51%、「体調不良時の行動」は、保体、養教とも80%以上が「休養睡眠」であり、「薬局薬店で相談」、「大衆薬使用」は合計で10%未満であった。

医薬品の授業に当たって知りたいことは、「主作用副作用」、「安全性」が保体、養教ともに約90%、「医薬品には危険性もあるので医薬品の正しい使い方を教えることに抵抗を感じる」は保体、養教とも21%、「医薬品の授業は生徒に有用か」については保体88%、養教91%であった。指導者は、医薬品に対して肯定的な意識をもつ反面、医薬品使用には抵抗感が存在し、適切な医薬品使用行動が選択されていないことや教育への抵抗感につながっている可能性が示唆された。

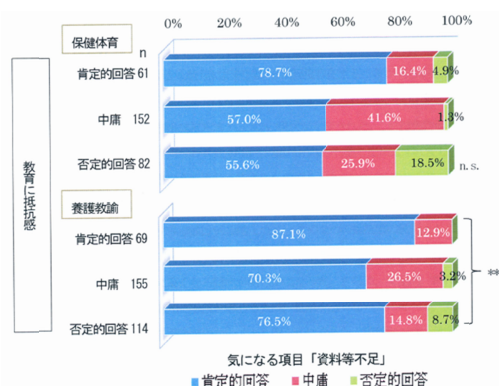


図1 「教育に抵抗感」と気になる項目「資料等不足」との関係

このような不安の軽減に係るものは、医薬品の教育新設の背景の理解や医薬品の安全性に関する情報であることが示唆された(図1)。従って、医薬品の教育を円滑に進めるためには、保健体育科教員や養護教諭向けの情報提供が有効であると考えられた。

(2) 授業実践前後の生徒の知識や意識の比較

「医薬品が体内で効くしくみ」について「詳しく知っている」及び「ある程度知っている」と回答した割合は合わせて18.9%から58.5%にまで上がった。薬の正しい使用法に

についても正答率が事前に比べて高くなった

図2。「医薬品には副作用がある」について「はい」と回答した割合は62.8%から72.7%に有意に増加した。医薬品の不適切な使用は改善傾向にあった。医薬品の学習に対する興味関心は全般的に高くなった。

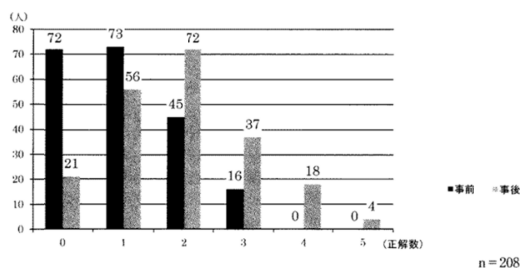


図2 正しい使用法の正答者の分布

(3) 作成・配付した小冊子の評価



先生からひろがるセルフメディケーションの表紙を示す。内容の6項目いずれにおいても「参考になった」、「理解できた」とする肯定的評価は60%以上であった。また、リスクとベネフィットのバランスについては、改善の余地があったことから修正の上、第2版を作成した。本小冊子については、ニーズに応じ配付している。

(4) デジタル絵本教材の開発

デジタル絵本教材として「医薬品はじめての一步」を作成した。また、このデジタル絵

本教材を活用するために指導展開例を作成し、「自信を持って取り組める医薬品の教育」に掲載するとともに、ホームページ上にアップロードした。

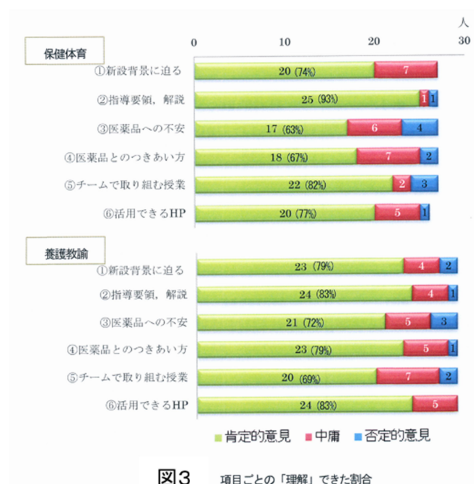


図3 項目ごとの「理解」できた割合



5 高校生主体のセルフメディケーション活動

高校生を対象とした意識調査から浮かび上がった課題は、生徒の半数が以前に病院からもらった薬を服用した経験があること、両親や祖父母から薬をもらうケースが多いことであった。活動では、薬局訪問および学園祭での展示、冊子作成を通じ生徒自身が医薬品の正しい使い方について意識が高まるとともに、薬局の活用の重要に気付くことができた点を挙げる事ができた。

引用文献

WHO: Guidelines for Regulatory Assessment

of Medical Products for Use in Self-medication.2000

公財 日本学校保健会：「医薬品」に関する教育の考え方・進め方、2011、1-13

文部科学省：中学校学習指導要領解説-保健体育編、自由書房、2008

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] 計4編

上田 裕司、鬼頭 英明、西岡 伸紀、富岡 剛、中学校学習指導要領による医薬品に関する授業実践研究、学校保健研究、査読有、55、2013、220-227

香田 由美、鬼頭 英明、医薬品の教育への養護教諭の関わりの検討-養護教諭の役割を生かした保健指導の実践から-、日本養護教諭教育学会誌、査読有、17、2014、55-62

鬼頭 英明、学校における医薬品に関する教育の指導、薬学雑誌、査読有、133、2013、1319-1323

鬼頭 英明、発達段階に応じた医薬品に関する指導の実際、学校保健研究、査読有、56、2015、405-408

[学会発表]

香田 由美、鬼頭 英明、寺町 ひとみ、医薬品および医薬品の教育に対する養護教諭の意識調査-指導の充実に向けた支援の在り方の検討、第20回養護教諭教育学会、2012

鬼頭 英明、学校での医薬品に関する教育の進め方、第59回日本学校保健学会、2012
香田 由美、鬼頭 英明、西岡 伸紀 他、医薬品の教育に対する中学校教員の意識調査-指導の充実に向けての情報提供ツールの検討、第59回日本学校保健学会、2012

鈴木 千春、上田 裕司、永田 智子、鬼頭 英明 他、医薬品の授業に活用できるデジタル絵本教材の開発、第59回日本学校保健学会、2012

鬼頭 英明、学校における医薬品に関する教育の指導、日本薬学会第133年会、2013

[図書]

上田 裕司、鬼頭 英明 他、日本学校保健会、自信を持って取り組める医薬品の教育-小・中・高等学校での実践事例集-、中学校保健体育科展開例、2012、9-13

香田 由美、鬼頭 英明、先生からひろがるセルフメディケーション、2012、8

香田 由美、鬼頭 英明、福岡県立門司学園学校生徒保健委員会編、セルフメディケーション~今、私たちに求められる健康管理~、2014、25p

[その他]

ホームページ等

<http://www.hyogo-u.ac.jp/kitohi17/shiryuu/index.htm>

6. 研究組織

1 研究代表者

鬼頭 英明 (KITO, Hideaki)

兵庫教育大学・大学院学校教育研究科・教授

研究者番号 90161512

2 研究分担者

西岡 伸紀 (NISHIOKA Nobuki)

兵庫教育大学・大学院学校教育研究科・教授

研究者番号 90198432

3 研究協力者

富岡 剛 (TOMIOKA Gou)

北垣 邦彦 (KITAGAKI Kunihiko)

上田 裕司 (UEDA Yuji)

香田 由美 (KOUDA Yumi)

西端 充志 (NISHIBATA Mitushi)

山下 和美 (YAMASHITA Kazumi)

鈴木 千春 (SUZUKI Chiharu)